

年末の窓拭きをしながら



自宅の外壁（杉板の下見張り）の塗装がはげてきたので、塗り直すことにした。といっても一部3階建の家のこと、自分ではできないので塗装業者に頼み、足場を組んでやってもらっている。今のうちにと足場に上り、普段は手が届かない高いところの窓ガラスを外から拭いた。仕上げの空拭きを入念にして、ピカピカに仕上げた。

窓拭きのついでに風呂掃除もした。床のタイルも壁もよく見ると結構汚れていて、カビキラーとバスクリンの力を借り、なんとかキレイと言ってもよい状態にまで回復した。風呂に入ったとき、たまに適当にゴシゴシやっていたが、そんなことじゃダメで、やっぱり日々意識して隅々まで丁寧に掃除しないといけない・・・と去年も一昨年も反省した。

それにしても寒風にさらされる外の仕事は大変だ。窓拭きだって水っぱなが垂れ、ビニール手袋をした手がかじかむ。塗装屋さんや大工さんの仕事は、毎日がこれだ。それに比べれば、私のようなコンサル業は楽とは言わないが甘い世界だ。それなりに大変なこともあるけど、文字通り骨身に沁みる冷たい作業はない。寒ければコタツで仕事をする。寒い思いをしなければ他人の本当の辛さは分からない。どれほど人間がボロになっていることやら・・・。

沖縄民謡の「ていんさぐぬ花」の歌詞に、**宝玉（たからだま）やていん 磨かには錆す 朝夕肝（チム）磨ち 浮世（ウチュ）渡ら**とあるのを思い出す。宝石だって磨かねば錆びてしまう。毎日心をきれいに磨いて世間を渡っていきないさい、ということ。自慢じゃないが、これまでの人生で一度たりとも意識して心を磨いたことはない。歯磨きだって適当にする私、肝磨きなんてこと思いつきもしなかった。心のカビキラーとかチムクリンが必要だ。



ブータン国王が、福島被災地の中学生に「君たちは龍をみたことがあるか」と問い、「私は見たことがある」と言われた。中学生たちは戸惑っていた。私もテレビを見ていて戸惑った。国王は、「人には人格と言う龍が住んでいて、その小さな龍はいろんな苦労を経験して大きく強く成長していく」という主旨の説明をされた。・・・それまで、吉本新喜劇の辻本に似ているなーとだけ見ていた国王が、急に尊い人に見えた。GNPではなくGNHを標榜する王国の人々は、きっと肝磨きをしているだろう。ブータンブームが起ころ、日本から大勢の観光客が押し掛け、清く正しい国で失礼な振る舞いをしなければいいけど、などと心配になってきた。でも、それ以前に、自分の中の龍は間違いなく居眠りをしているから、なんだか申し訳ない。



私が大学を卒業してコンサル業に就いた1980年代の後半、行政の諸計画の文書に常套句として使われたのが「21世紀まであと〇〇年となり・・・」と言うフレーズで、それは国際化と情報化の進展した活力ある社会の到来を想定したものだった。実際はどうか？21世紀になり既に12年経ったが、この間あまりいいことはなかった。それどころか、テロや自然災害、経済危機に国家の財政危機など“百年に一度”の冠がつく出来事が毎年のように起こっている。つくづく、あの当時作文したことに何の意味があったのかと思う。

震災と原発事故の被害と戦う東北の人の姿や復旧の応援に駆け付けた世界中の人、復興を支えるボランティアの人たちを見ていると、偉いと思う。この人たちに比べ、自分の中の龍ときたら、かなりボロい。来年は辰年。人格と言う龍を立派に育てよう・・・そう思ったのは、会社の年賀状にものすごくチャライ龍のイラストを使ってしまい、すでに投函した後だった。